

日本IT書紀

052 今カラデモ遅クハナイ

04 含牙篇
卷之七 乾坤

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

今カラデモ遅クハナイ

一

——生命線・滿蒙。

この言葉が政治的・経済的スローガンとして使われるようになるのは一九三〇年代に入ってからである。民衆は訳も知らないまま何とはなく、そこに込められた非常な、ないし悲壮な決意を感じ取った。

それはある種の雰囲気というものであって、財閥が權益の維持・拡大に軍事力を利用しようとし、その軍部が右翼国粹主義と結びついた結果であるという歴史的プロセスに気がついた人は多くなかった。

昭和大恐慌、金解禁、モラトリアムといった経済界の激変を経て、日本企業が滿州に投下した資本総額は対外投資の五八%を占めていた。滿州は鉄鉱石や石炭など重工業資源の輸入元であったし、かつ国内産業にとって重要な輸出先でもあった。

同時に米欧列強諸国も中国大陸と滿州に重大な関心を抱

いていた。特にアメリカ合衆国は張学良を通じて新たな鉄道や港湾の建設に資金を援助するなど、対日経済対抗策を強化しつつあった。逼迫する経済と農村の疲弊に日本の軍部は危機感を持ったといっている。

樺太や滿州への開拓移民奨励もまた、不況と農村の疲弊を解決する策として採用されていた。つまり、国内に充満する大量の失業者を軍事力と殖民力に転用し、軍事力をもつて中国・滿州など近隣を植民地化する。

そのことで国内の負荷を軽減し、併せて生産量と消費を増やそうというのである。朝鮮、台湾、滿州さらに中華民国・山東半島の租借地まで包含したブロック経済圏こそ、大日本帝国の姿だった。

明治維新からこのかた、挙国一致で殖産興業に邁進してきた「列強入り」の無理が、五十年を経て一気に噴出したわけだった。政府・産業界は「殖産興業」「富国強兵」という明治以来の産業振興策が老朽化したことに薄々は気がついていた。にもかかわらず、資本の再整備による国力の充実こそ必要なことに目を背け、軍事力をバックボーンとする侵略主義に傾いた。

三一年四月十三日に総辞職した浜口雄幸のあと、第二次若槻礼次郎内閣、犬養毅内閣と短命政権が続き、政党政治は終焉を迎える。「愛国」の名のもとに中学校で柔剣道が

必修科目となり、田河水泡えがくところの「のらくろ」が人気を集めた。自由主義的活動に圧力がかけられ、思想調査が公然と行われるようになっていく。

評論家・大宅壮一は『一九三一—一九四五年の日本』（一九六八、世界文化社）の中で

日清・日露・第一次大戦と三回戦を勝ちぬいた日本は、いよいよ準決勝へ出場するわけだが、これは田舎の弱小チームがだんだん強くなって甲子園で優勝をねらうようなものである。その冬季合宿練習ともいべきものが、この満州事変である。

と評している。

「満州事変」と呼ばれる事件は、一九三二年（昭和六）九月十八日の午後十時過ぎに起こった。日本史で「柳条湖事件」とも表記されるのは、多分に「満州」という言葉を忌避したい気持ちがあるからかもしれない。

満州・奉天の北方七・五キロ郊外に「柳条湖」という湖がある。

筆者は高校日本史の教科書で「柳条溝」と学習した。どちらも「シ」が付く漢字だし、音も「コ」と「コウ」の違いなので、最初、ひよっとすると「湖」は「溝」の誤植で

はないかと疑った。

人というのは最初に覚えたことがらに固執する。

ところが「溝」が間違いである——というより、柳条湖と柳条溝はそれぞれに存在する全く別の地——であることが分かった。向こう岸が見えない黄河や長江を知っている中国の人は、帯状の小さな湖に「溝」という文字を当てた。このため「柳条溝」と表記する地名もあるということだ。その柳条湖の近くを南満州鉄道（満鉄）が走っていた。それが爆破された。

満鉄は日露戦争の戦果として、日本が租借権と経営権を握った。ポーツマスで結ばれた講和条約のあと、アメリカの鉄道王ハリマンがときの首相・桂太郎に資本参加を申し入れ、

——アメリカの鉄道を満鉄と結び、シベリア鉄道を経てオリエント急行に乗り入れれば、世界一周鉄道が実現すると打ち上げたことはすでに書いた。

この時代、鉄道は旅客のためにあつたのではなく、第一に物資と軍兵を運ぶためにあつた。工業の原材料を運び製品を運び、危急が生じれば万の軍兵を運ぶことができる。中国東北地域における日本の最大の資産であるとともに、最大の軍事施設であつたといつていい。同時にそれはアメリカ、イギリスにとつての垂涎の好餌でもあつた。

それが何者かによつて爆破された。

二

——答は中国にある。

関東軍は電光石火の行動を起こし、東京で緊急閣議が開かれていた間に長春、奉天など満州の要地を占領してしまつた。鉄道の爆破から軍隊の出勤・占領まで、あまりに手際がよかつた。

これがために外相・幣原喜重郎は関東軍の謀略であろうと推測し、国際世論をもつて事態の解決を図ろうとした。すなわち閣議決定で「不拡大声明」を發表するとともに、国際連盟による調査団を受け入れた。

国際連盟はイギリスのリットン卿を团长とする調査団を派遣したが、その調査は容易に進まなかつた。報告書をまとめるには一年を要した。この間、関東軍は張学良が本営を移した錦州を空爆するなど、既成事実を積み上げることができた。

リットン調査団——正式には「国際連盟日華紛争調査委員会」——はリットン卿、フランス、アメリカ、イタリア、ドイツの五か国の委員で構成し、日本と中国から一人ずつ陪席者が加えられた。

米欧列強がアジアの紛争を調停するのは国際連盟の成立過程からいつて当然のように見えるが、日本を含む六か国が侵略する側、中国のみが侵略される側だつたことを考えると、いまひとつ釈然としないものがある。

翌三二年十月二日に公表された調査団の報告書は

- ① 中国とその東北部および日本との関係。
- ② 日本と中国との紛争解決に関する結論。
- ③ 国際連盟理事会の提案。

——の三部で構成されていた。

第一部では満州が中国の構成部分であることを認め、満州事変から満州国独立にいたる経過を「日本の侵略の結果である」と断じた。

事件の首謀者は関東軍高級参謀の板垣征四郎（大佐）と石原莞爾（中佐）、鉄道を爆破したのは分遣隊隊長の河本末守（中尉）だつた。だが調査団は犯行者を特定せず、曖昧に済ませていた。

だけでなく提案と結論では日本の満州における権益を認めたいうえで、「事変前への現状復帰は紛争をいつそうひどくする可能性がある」とし、日本と中国間に満州に関する新たな協定を勧告するなど妥協的な内容だつた。

この事件は張作霖事件の延長線上にあった。

三年前、北京からの帰途にあった張作霖を同じ口で爆殺したとき、首謀者・河本大作（当時大佐）を「停職」という処分にとどめたため、ときの首相・田中義一は天皇から厳しく叱責され辞職を余儀なくされている。

これに対して柳条湖事件の板垣と石原は何の咎めも受かず、反対に陸軍にあって出世までした。一九二八年と一九三一年では陸軍内部の構造と意識にずいぶん違いがあった。

陸軍ばかりではなかった。

産業界の意を受け、あるいは財界に迎合した新聞が

——生命線・満蒙。

を煽り立てた。

一九三三年の二月二十四日、国際連盟総会はリットン調査団の報告書に基づき、日本帝国に対して満州から軍隊を撤回し満州の占領を中止するよう勧告する決議を可決した。それに異議を唱え、日本全権代表・松岡洋右が決然と退場したとき新聞各社は次のように報じた。

松岡の姿は、凱旋將軍のようだった。わが国は始めて、
『我は我なり』という独自の外交を打ち立てるにいたったのだ。

そればかりか、全国百三十二社が作成した共同声明を、そろって一面に掲載した。その声明文には日本電報通信社、報知新聞社、東京日日新聞社、東京朝日新聞社、中外商業新聞社、大阪毎日新聞社、大阪朝日新聞社、読売新聞社、国民新聞社、都新聞社、時事新報社、新聞連合社などが名を連ねていた。

満州の政治的安定は、極東の平和を維持する絶対の条件である。しかして満州国の独立とその健全なる発達とは、同地域を安定せしむる唯一最善の途である。東洋平和の保全を自己の崇高なる使命と信じ、かつそこに最大の利害を有する日本が、国民を挙げて満州国を支援するの決意をなしたことは、まことに理の当然といわねばならない。いな、ひとり日本のみならず、真に世界の平和を希求する文明諸国は、ひとしく満州国を承認し、かつその成長に協力するの義務ありというも過言ではないのである。

然るに国際連盟の諸国中には、今なお満州の現実に関する研究を欠き、従って東洋平和の随一の方途を認識しないものがある。われ等は、かかる国々の理解を全からしめんことを、わが当局者に要望すると共に、いやしくも満州国の厳然たる存立を危ううするがごとき解決案は、たといいか

なる事情、いかなる背景において提起されるを問わず、断じて受諾すべきものにあらざることを、日本言論機関の名においてここに明確に声明するものである。

新聞が変節したのである。

三

橋本欣五郎という陸軍大佐がいた。

一八九〇年(明治二十三)福岡県に生まれ岡山で少年時代を過ごした。陸軍士官学校二十三期卒、一九二〇年陸軍大学校を出て満州里特務機関長を務めた。二七年から三年間、トルコ公使館付武官として勤務し、三〇年参謀本部ロシア班長となった。

このとき彼は、陸軍省の佐官級若手士官を集め、「桜会」を結成した。北一輝や大川周明らと交流し、政府の転覆を計画した。大川を通じて陸軍大臣・宇垣一成、軍務局長・小磯国昭、軍務課長・永田鉄山などを説かしめ、クーデター後、軍部独裁政権の首班となる内諾を得た。

しかし橋本の計画は、途中で宇垣が及び腰になったために頓挫し、陸軍省は首謀者を左遷もしくは予備役に編入してウヤムヤにした。

いわゆる「三月事件」である。

これを機に橋本はいったん退役したが、のち応召し野戦重砲第十三連隊長、一九四二年衆議院議員に当選して終戦となった。A級戦犯として終身刑の判決を受けたが五五年に出獄した。五七年没。享年六十七。

このとき内閣および陸軍省が毅然たる態度で首謀者たちを処罰していれば、あるいは関東軍の暴走を阻止できたかもしれないなかった。また「柳条湖事件」の首謀者を野放しにしていなければ、十月事件——荒木貞夫中将を擁立した大川周明らによるクーデター未遂計画——も起こらなかったといわれている。

一九三二年二月、井上準之助が暗殺された。享年六十三。同年三月、三井合名会社理事長の団琢磨が射殺された。

享年七十四。

この二つの暗殺事件は、史上、「血盟団事件」と称される。

五・一五事件はこの二か月後に起こった。

首相犬養毅、射殺。

「話せば分かる」

銃口を向けた将校に語りかけたこの言葉が最後になった。

「問答無用」

銃口を向けた青年将校の言葉が聞こえたかどうか。享年

七十七。

代わって内閣首班に指名されたのは海軍大将で朝鮮総督の齋藤実だった。齋藤は政党、軍部、官僚の「三者一体」
「挙国一致」内閣を標榜したが、結局は三者の勢力バランスを保つのが精一杯だった。

一九三五年八月、陸軍省内で軍務局長永田鉄山が斬殺されるという事件が発覚した。下手人は相沢三郎という陸軍中佐だった。

斬殺された永田は「統制派」と称された陸軍省エリートで組織する「桜会」の代表格、相沢が属したのは現場諸部隊を指揮する青年将校が中心の「皇道派」だった。皇道派は思想的には観念的天皇中心主義、天皇親政を理想とする主張だった。つまりこの事件は、統制派と皇道派の対立が背景にあった。

統制派は三月事件の頓挫を経て、合法的手段による軍事政権の樹立を目指していた。これに対して皇道派青年将校たちは、統制派がいうところの「合法的手段」が政治権力を欲するだけの欺瞞に見えた。

その欺瞞のために摩擦が激しさを増している満州、中国に駆り出されるのは自分たちであることに、彼らは焦燥感を募らせた。ことに皇道派が危機感を強くしたのは、彼らが率いる兵卒の出身母体である農村の疲弊だった。

四

紡績業の不況で生糸の原料である繭の価格が下がっていた。加えて一九三一年に東北と北海道が冷害のために凶作となり、農民はワラビやトチ、ドングリなどで飢えをしのがなければならなかった。

三三年は豊作だったが、陸軍省が中国大陸に送り込んだ陸軍十二個師団七十万人分の食糧として大量の米を買い付けた結果、農漁村に十分な量の米が行き渡らなかった。翌三四年の秋はひどい凶作が全国を襲った。

このため、満足に食事ができない欠食児童が全国に二十万人も出た。農家が抱える負債総額は、一九三〇年に四十億円を超えていたといわれている。農村では自殺や娘の身売りが日常化していた。これに対して都市部では「東京音頭」が流行し、宝塚少女歌劇団がもてはやされ、軽演劇場「ムーランルージュ」が盛況となっていた。

凶作に飢える農村、軍需景気に沸く都市。

——都市の繁栄は、農村からの搾取で成り立っている。と、皇道派青年将校たちは考えた。

部下の兵卒たちがなけなしの給与から故郷に仕送りする姿を見て憤った青年将校は一人や二人ではなかった。農村

が疲弊すれば、わが帝国軍は弱兵の集まりになってしまふ。軍需景気の恩恵を受ける財閥を政府が擁護し、だけでなく癒着しているのであれば、農村は救われなければならないか。

一九三六年二月二十六日早朝、東京は前夜来の粉雪に覆われていた。

筆者は大学受験のおり、語呂合わせで「ヒドクサムイヒ」とその年を覚えた。

粉雪を蹴って、皇道派の青年将校が決起した。動いたのは第一師団と近衛連隊など千四百人の兵卒である。この中に落語家「柳家小さん」として知られる小林盛夫が、二等兵として混じっていた。

——命令で皇居の御門の前を機関銃で護っていた。何でも反乱軍が天皇さまを誘拐しにくるつてんで、そりゃおっかなかったよ。そしたらさ、おいらたちが反乱軍だつていうじゃない。何がなんだか分からなくなったよね。

弟子の「さん治」（のち真打に昇進して「小三治」という人が筆者の高校の先輩で、文化祭で一席打ったとき、そのような話をしていたことを覚えている。

事件の直接の引き金となったのは、皇道派青年将校に近しい心情を抱いていた中佐相沢三郎が統制派の陸軍軍務局長（少将）永田鉄山を陸軍省内で斬殺したことにあった。そ

の軍法会議に弁護人として立った皇道派青年将校たちは、裁判を通じて意思を統一し結束を固めていった。

陸軍の主導権を握っていた統制派は、彼ら「皇道派」を国内に置いておくのは危険と見た。皇道派の中心的人物たちが所屬する第一師団を満州に派遣することを決めたのが、決起を早めた原因だった。

・齋藤実（内大臣）、斬殺。享年七十八。

・高橋是清（大蔵大臣）、射殺。享年八十一。

・渡辺錠太郎（陸軍教育總監）、射殺。享年六十二。

・鈴木貫太郎（侍従長）、重傷。

死亡が伝えられた岡田啓介首相は、官邸の一室に潜んでいて無事だった。

別荘に滞在中だった牧野伸顕（前内大臣）、西園寺公望（元老）は避難して事なきを得た。

皇道派の青年将校たちは溜池の山王ホテル、料亭「幸楽」および首相官邸を占拠し、大将・真崎甚三郎を首班とする国家改革内閣を樹立することを訴えた。霞ヶ関、永田町、溜池の一带に非常線を張り、全国の同志の決起を促したが、その結果は無残な失敗に終わった。

クーデターの首謀者である野中四郎（大尉）は短銃で自

決、安藤輝三（大尉）、栗原安秀（中尉）、坂井直（中尉）など十七人が「逆賊」の名のもとに、上告なし、弁護士なし、非公開という軍事法廷で刑を宣告され、時をおかず死刑に処せられた。

統制派は皇道派を強引に封じ込めたが、それがやがて二・二六事件の青年将校たちを「憂国の士」として礼賛する風潮を生み出した。

この年の一月、日本はロンドン軍縮会議からの離脱を表明し、一方で労働運動や自由主義・共産主義への思想弾圧を強めていた。中国の山東半島と満州に、日本の産業界は莫大な投資を行い、何百万人もの開拓民を送り込んでいた。

軍事力を背景にした帝国主義の矛盾が露呈し、これが政策の硬直化を生み、大日本帝国は二進も三進も行かない自縄自縛の閉塞感に陥っていく。以後、日本は軍国主義の道をまっしぐらに進むことになるのだが、二・二六事件に際して戒厳司令部が発した「今カラデモ遅クハナイ」は、日本の針路を意味していた。

~~~~~ 補注 ~~~~~

満州 Manzhou : 現在は中華人民共和国東北地区から内モンゴル自治区北東部の総称で、語源はかつてここに仏教国「金」という国家を建てたツングース系の女真族が自らを「文殊菩薩の子孫」の意味で「マンチュウ」と称したことに発する。

張學良 ちょう・がくりよう／1898～2001。日本軍によって爆殺された満州軍閥首領・張作霖の息子で、中国国民政府の陸海空軍副司令だったが、満州事変により満州を追われた。一九三六年十二月、蒋介石を西安に監禁して抗日民族統一戦線を実現して日中戦争を中国軍有利に導いた。のち蒋介石軍に捕われ第二次大戦後も台湾に軟禁された。九三年軟禁を解かれ移住先のハワイの病院で死去した。中華人民共和国では「千古の功臣」「民族の英雄」という高い評価が定着している。

田河水泡 たがわ・すいほう／1899～1989。本名は高見沢伸太郎。東京に生まれ日本美術学校を出た。画家を目指したが生活のために新作落語の台本を書くなどしているうち一九三一年「少年倶楽部」(講談社)に漫画「のらくろ」を発表し人気を得た。「サザエさん」の長谷川町子は弟子。

のらくろ 田河水泡が一九三二年から雑誌「少年倶楽部」に連載した漫画で、陸軍を舞台に黒い野良犬の「のらくろ」がブル連隊長のもとで出世していく過程を描いた。太平洋戦争で軍を擲捨するものとして執筆禁止処分となった。終戦後、軍国主義色を払拭し復活した。

リットン卿 Victor Alexander Lytton／1876～1947。小

説『ボンペイ最後の日』、名句「ペンは剣よりも強し」で知られる作家エドワード・ジョージ・ブルワーズ・リットンの孫。国際連盟イギリス代表を務めた。

調査団の陪席者 日本からは外交官の吉田伊三郎、中国は外交官の顧維鈞が参加した。顧維鈞については第四十八補注。

板垣征四郎 いたがき・せいしろう／1885～1948。一九三二年、関東軍司令部付となつて表立った活動を控えたが、三七年には第五師団長として復活し、三八年には第一次近衛内閣で陸相に抜擢された。三九年支那派遣軍総参謀長、四一年に陸軍大將に上り朝鮮軍司令官、四五年に第十七方面軍司令官、第七方面軍司令官で終戦を迎え、A級戦犯として四八年絞首刑に処せられた。

石原莞爾 いしはら・かんじ／1886～1949。一九三二年にジュネーブ軍縮会議の随員となり、三五年に陸軍参謀本部作戦課長を務めた。のち東条英機と意見が合わず、四一年に予備役に編入された。翌年、立命館大学教授となり四九年に没した。

張作霖 第四十八補注参照

河本大作 第四十八補注参照

松岡洋右 まつおか・ようすけ／1880～1946。国際連盟日本全権として同連盟からの日本脱退を宣言したのち、一九四〇年発足の第二次近衛内閣で外相を務めた。「大東亜共栄圏」構想を打ち出してイタリア、ナチス・ドイツと同盟を結んだ。第二次大戦後、A級戦犯として逮捕されたが東京裁判の最中に病状が悪化し東大病院で死亡した。死去の直前、「日独伊三国同盟は一生の不覚だった」と漏らした。

北一輝 きた・いっき／1883～1937。本名は「北輝次郎」といった。新潟県の佐渡に生まれ、一九〇五年に上京して幸

徳秋水、堺利彦などと交流した。農村の疲弊と都市の繁栄を社会主義的手法で改革しつつ天皇制を軸とする国家体制を志向し、陸軍青年将校の精神的な支えとなった。二・二六事件で反乱将校に助言と教唆を与えた罪で軍法会議にかけられ刑死した。

大川周明 おおかわ・しゅうめい／1886～1957。山形県に生まれ東京帝国大学を出て陸軍参謀本部の依頼で翻訳の仕事をした。一九一八年満州鉄道に入り北一輝、満川亀太郎などと交流した。三二年五・一五事件に関与したとして禁固九年の判決を受けたが三九年東亜経済調査局最高顧問。第二次大戦後、A級戦犯として逮捕されたが精神障害を起し免訴となった。

宇垣一成 うがき・かずしげ／1868～1957。岡山県に生まれ陸軍士官学校第一期、陸軍大学校卒。一九二四年清浦圭吾内閣、加藤高明内閣、若槻礼次郎内閣で陸相を務めた。師団縮小と兵制近代化に努める一方、浜口雄幸内閣のとき陸軍内の「宇垣閥」の領袖として財界から首相に推された。第二次大戦後、五三年参院議員となった。

小磯国昭 こいそ・くにあき／1880～1950。栃木県に生まれ陸軍士官学校十二期卒。一九一六年満州独立を画策し三二年陸軍省次官を経て関東軍参謀長、第五師団長、朝鮮軍司令長官などを歴任した。三九年平沼騏一郎内閣で開拓相として南方進出を推進し四二年朝鮮総督となった。東条英機内閣のあと首相に任じられ対中国和平工作に失敗した。ポツダム宣言無条件受諾後、A級戦犯として逮捕され終身刑となった。

永田鉄山 ながた・てつざん／1884～1935。長野県に生まれ一九一三年ドイツで軍事を学んだ。二八年第三連隊長、三〇年陸軍省軍務局軍事課長、三二年少将に進み参謀本部第二部長、

歩兵第一師団長を経て三四年軍務局長。統制派の中心人物と目され皇道派の教育総監真崎甚三郎を罷免したため三五年陸軍省内で相沢三郎中佐に斬殺された。

荒木貞夫 あらき・さだお／1877～1966。東京に生まれ陸軍士官学校九期、陸軍大学校卒。一九一八年シベリア出兵で特務機関長、憲兵司令官、陸軍大学校長、第六師団長、三一年犬養毅内閣で陸相。皇道派青年将校に担がれ二・二六事件では反乱将校たちに同情的な姿勢を見せたが、軍法会議の査問で翻意した。三八年第一次近衛文麿内閣で文相となり軍国主義的教育を推進した。

団 琢磨 だん・たくま／1858～1932。福岡藩(福岡県)藩士の神屋家に生まれ団家の養嗣子となった。一八七一年(明治四)岩倉使節団に同行してアメリカ合衆国に渡り、マサチューセッツ工科大学で鉱山学を学んだ。帰国後、大阪専門学校教授、東京帝国大学助教などを経て工部省工部鉱山寮に技師として入り、三池炭坑が三井鉱山に払い下げられたのに伴い三池炭坑事務長となった。九四年三井鉱山合名会社専務理事、一九一一年三井鉱山会長、一四年三井合名会社理事長として政財界に力を振るった。

犬養 毅 いぬかい・つよし／1855～1932。岡山県に生まれ慶応義塾に在学中、報知新聞記者として西南戦争に従軍した。八一年統計院権少書記官、八二年立憲改進黨に参加し自由民権運動を推進し九〇年第一回総選挙で衆院議員となった。九六年進歩党を結党、九八年自由党と合併して憲政党党首となり第一次大隈重信内閣で文相、一九一〇年又新会と合同して立憲国民党を組織した。孫文の辛亥革命を支援し、一七国民党総裁、二〇年ごろ

から普通選挙運動の表に立ち二四年第一次加藤高明内閣で通信相二九年に引退を表明したが二二年難局を乗り切るため推されて首相となった。戦後の吉田茂内閣法相の犬養健(1896~1960)は息子、評論家の犬養道子(1921~2017)は孫。

斎藤 実 さいとう・まこと/1858~1936。陸前藩(岩手県)に生まれ、一八七九年海軍兵学校を出てアメリカ合衆国に留学した。八八年海軍参謀本部、海軍大臣官房人事課長などを経て日清戦争以後しばらく戦艦の艦長を務めた。九八年山本権兵衛海相のとき海軍省次官、一九〇六年西園寺公望内閣で海相となった。日露戦争では海軍拡張計画を推進し一九二二年大将に進んだ。シーメンス事件で海相を辞任し、一九年朝鮮総督、二七年ジュネーブ軍縮会議で日本全権、三二年五月の五・一五事件で犬養内閣が倒れた後組閣し三四年の帝人事件で引責辞任。のち内大臣に就任し、二・二六事件で殺害された。

相沢三郎 あいざわ・さぶろう/1889~1936。宮城県に生まれ陸軍士官学校二期卒。青森の歩兵第五連隊大隊長のと き皇道派に加わり、三五年皇道派の教育総監真崎甚三郎が罷免されたことを怒って統制派の永田鉄山を斬殺した。軍法会議を経て三六年七月死刑となった。

宝塚少女歌劇団 一九一三年に箕面有馬電気軌道(現阪急電鉄)が開通したとき、乗客を増やすために保養施設・遊園地「宝塚新温泉」をオープンした。その呼びものとして少女のみによる「宝塚唱歌隊」を編成したのが始まりとなった。歌唱だけでなく演劇を加え一四年四月に初めて公演を行った。一九年に宝塚音楽歌劇学校を設立し、それを母体とした「宝塚少女歌劇団」を発足させた。「レビュー」を取り入れ二七年に上演された「モン・パリ」で

唄われた「うるわしの思い出モン・パリ」が流行歌となった。

ムーランルージュ 一九三一年東京・新宿に開業した劇場で独自の劇団と脚本製作部門を持つていた。上演された喜劇はおおいに繁盛しこれを模倣した大阪吉本興業、浅草花月劇場、古川ロッパ一座、エノケン劇場、シミキン一座、水の江滝子一座などを生むきっかけとなった。当時、新宿は映画館、寄席などが数多くあって、芸能や文学に憧れる青年が集まっていた。太平洋戦争の戦災で焼失し四七年に再建され、ここから森繁久彌、由利徹、三崎千恵子、望月優子などが出た。

二・二六事件の兵士たち その中に、やがて日本ワットソン統計会計機械の社員として活躍する島村浩もいた。彼は千葉県習志野にあった戦車部隊に所属し、皇居二重橋の前で機関銃を構えていたが、小さんと同じように、「自分たちが反乱軍とされていることに驚いた」と後日語っている。

柳家小さん 江戸中期から続く落語会の名跡で、最も著名なのは三代目(本名豊島銀之助、1857~1930)である。ここでいう小さんは五代目で、本名は「小林盛夫(1915~2002)」といった。一九三三年「柳家栗之助」の名で初高座を踏んだ。七年日本落語協会会長。三代目小さんの芸風を受け継ぎ戦後の落語界にあつて桂文楽、三遊亭圓生、古今亭志ん生の三名人に次ぐ最後の名人とされる。

柳家小三治 やなぎや・こさんじ。本稿に登場する小三治は十代目。本名は郡山剛藏(1939~2021)といった。二〇一〇年日本落語協会会長となった。

高橋是清 たかはし・これきよ/1854~1936。幕府御用絵師の家に生まれ仙台藩足輕高橋家の養子となった。一八六五年

江戸に出て英語を学び六七年渡米。六八年帰国し通訳・翻訳業を営んだのち農商務省に入った。八九年初代特許局長、九二年日本銀行に入り九五年横浜正金銀行に移って副総裁、一九二一年日銀総裁。一三年山本権兵衛内閣、一八年原敬内閣で蔵相、二二年首相。一度は政界を引退したが二七年の金融恐慌に際して再び蔵相に就任し経済の混乱終息に見通しがついたとして四十二日で辞任した。政府の財政難を日銀発行の公債で賄う新手法で乗り切り軍事費の圧縮に努めた。二・二六事件で殺害された主因はここにあった。

渡辺錠太郎 わたなべ・じょうたろう／1874～1936。愛知県に生まれ一九〇三年陸軍大学校を出て二〇年歩兵第二旅団長、二五年陸軍大学校校長、二六年第七師団長、二九年航空本部長、三〇年台湾軍司令官などを歴任し大将。三五年名古屋市の演説会で軍の中立性を訴え、国体明徴論や天皇機関説排撃論を批判した。これが皇道派青年将校の反発を買ひ、二・二六事件で殺害対象者リストに挙げられた。

鈴木貞太郎 すずき・かんたろう／1867～1948。大阪に大阪に生まれ一八八七年海軍兵学校卒、一九〇一年ドイツ駐在武官などを経て一四年海軍省次官、一八年海軍兵学校校長、第二・第三艦隊司令官のち大将に昇進し二四年連合艦隊長官となった。二九年に退役して侍従長兼枢密院顧問、二・二六事件で重傷を負ったが四〇年枢密院副議長、四四年同院議長から四五年四月首相。ポツダム宣言無条件受諾の道を開いた点で評価される一方、四五年六月に天皇から早期終戦の指示を受けていながら実行しなかったことが批判されている。

岡田啓介 おかだ・けいすけ／1868～1952。福井県に生

まれ一八八九年海軍兵学校を出て日清戦争時少尉、日露戦争では戦艦「春日」艦長を務めた。日本海軍に水雷術を導入した。一九一三年海軍省に戻り人事局長、海軍艦政本部長、次官を経て二四年大将、同年連合艦隊司令長官に就任し二七年田中義一内閣、三二年斎藤実内閣で海相。三四年首相となり二・二六事件では死亡と報道されたこともあった。太平洋戦争開戦を阻止できず、四三年から東条内閣の打倒と和平工作を指導した。終戦時内閣書記官の迫水久常は娘婿である。

牧野伸顕 まきの・のぶあき／1861～1949。薩摩藩(鹿児島県)に生まれ一八七一年大久保利通の遣米使節団に同行してアメリカに留学した。七九年外務省に入り憲法制度調査に参加したことから伊藤博文の知遇を得た。第二次西園寺内閣で農商務相、第一次山本内閣で外相。シベリア出兵に反対の立場を取り、一九一九年パリ講和会議で日本全権、二一年宮内相、二五年内大臣。軍部の台頭に対抗して重臣会議のウエイトを高めることに尽力した。その娘婿が吉田茂である。

西園寺公望 さいおんじ・きんもち／1849～1940。京都の公卿・徳大寺家に生まれ西園寺家の養子となった。戊辰戦争では山陰道鎮撫総督、会津討伐越後口大參謀を務めた。のち、七一年パリに留学した。八〇年帰国しパリで知己となった中江兆民と「東洋自由新聞」を創刊、八五年から九一年にかけてヨーロッパ列国公使を務めた。第二次伊藤博文内閣で外相、第三次伊藤内閣で文相、第四次伊藤内閣で首相臨時代理となり、一九一九年元勳。昭和初期の内閣首班を指名したが、二・二六事件で限界を感じ、内大臣と協議のうえ首班指名を行うようになった。日独伊三国同盟に反対したが四〇年静岡県興津の別邸で病死した。

山王ホテル 一九三二年、東京・赤坂の日枝神社下に開業した。地下一階にアイスリンクを備えていた。一九四五年八月、ポツダム宣言無条件受諾後、連合国軍総司令部に接収された。その跡地は「山王パークタワー」となっている。

料亭「幸楽」 山王ホテルの隣にあった高級料亭で、政財界の会合の場として使われた。のちにその跡地がホテルニュージャパンとなり、現在は「プリデンシャルビル」となっている。

真崎甚三郎 まさき・じんざぶろう／1876～1956。佐賀県に生まれ一九〇七年陸軍大学校を出た。一四年歩兵第四十二連隊大隊長、一五年久留米捕虜収容所所長、二〇年陸軍省軍事課長、陸軍士官学校校長、二七年第八師団長、二九年第一師団長、三一年台湾軍司令官、三二年参謀次官、三三年大将。荒木貞夫とともに皇道派の中心にあつて、二・二六事件のとき密かに組閣の準備を進めたが、クーデター失敗で軍法会議にかけられた。反乱幫助罪の適用は免れたが以後退役し、日中戦争、第二次大戦を通じて沈黙を貫いた。

決起部隊の終焉 二・二六事件勃発の報せを聞いた昭和天皇は「朕自ら近衛師団を率ゐこれが鎮定に当たらん」と述べ、可及的速やかな鎮圧の意向を示したという。二十八日午前五時過ぎ、「戒厳司令官ハ三宅坂付近ヲ占拠シアル將校以下ヲ以テ速ヤカニ現姿勢ヲ撤シ各所属部隊ノ隷下ニ復帰セシムヘシ」の奉勅命令が出た。

二十九日、部隊上空を飛ぶ飛行機から「下士官兵ニ告グ、今カラデモ遅クハナイカラ原隊へ帰レ。抵抗スル者ハ全部逆賊デアルカラ射殺スル。オ前達ノ父母兄弟ハ国賊トナルノデ皆泣イテオルゾ」という文面のチラシが撒かれた。また九段下の軍人会館の戒厳司令部からも同様の放送が流れ反乱は一気に終息していった。

日本IT書紀 052 今カラデモ遅クハナイ

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会

<http://www.ossaj.org/>

info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。